MfG_J_beauty_is_in_the_details

サフラン酒、離れのストーリー作りの試み

１. 離れの入口、廊下前の欄間
２. 離れの二階、廊下の手摺りの飾り
３. 離れの一階、新井石禅師の書

2022年5月
春日

サフラン酒には、さまざまな「美」の趣向があり、そのなかには、凝視しないと気づかないものもあります。
離れの玄関を入って廊下にあがると、目の前にある、「黒柿の透かし彫りの欄間」、そして二階、廊下の、見逃しがちな「手摺りの飾り」。　気づかずに過ぎ去るのは、あまりにもったいないストーリーだと思います。

この欄間の後ろにある床の間にかかる新井石禅師の書は、奇縁のストーリーの典型ですが、これも離れのガイドで重要な解説ポイントです。

1. 離れの入口、廊下前の欄間

黒柿の透かし彫りの欄間は、豪商の迎賓館玄関口を飾るにふさわしい、稀代の名品です。着目すべきは三点です。

（１）これだけ大きな柿の木は貴重、しかも黒柿です。

（２）驚くべきデザイン力。黒色のあるべきところに柿の渋を生かした、竹の節、葉。雀の体、羽。私らは完成した木彫を見ていますが、彫る前には、この表面は見えません。恐らく、10㎜ほど手前を見て、奥に柿の渋が存在することを類推しつつ、指物師と彫る深さを相談しています。

（３）その指示に従い、堅い柿の一木の透かし彫りにしていく指物師の腕も、たしかなものです。

奇跡の欄間の中央部

右側の雀も見事

竹の節と葉、雀の体と羽と、ほしいところに柿渋の黒。
美は細部に宿る、という言葉がありますが、まさに、
見れば見るほど、そのデザインの迫力に驚きます。

どんなにガイド時間が短いゲストの場合にも、じっと見つめて
いただく時間を、と留意しています。

でも玄関の上り口にある欄間ですから、画題にも深い
意味があるはずです。隠されている意味は何でしょう。

「竹雀図」は京都の本願寺書院の国宝・ふすま絵にあるように、
竹と雀の画には、『燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや』、という
意味があるようです。（「史記」陳渉世家）

転じて、
「視野を広くして大きく羽ばたけ」
「生き方を笑われても気にするな」
「最後、信じられるのは自分しかいない」
「自分を信じてやっていこう」

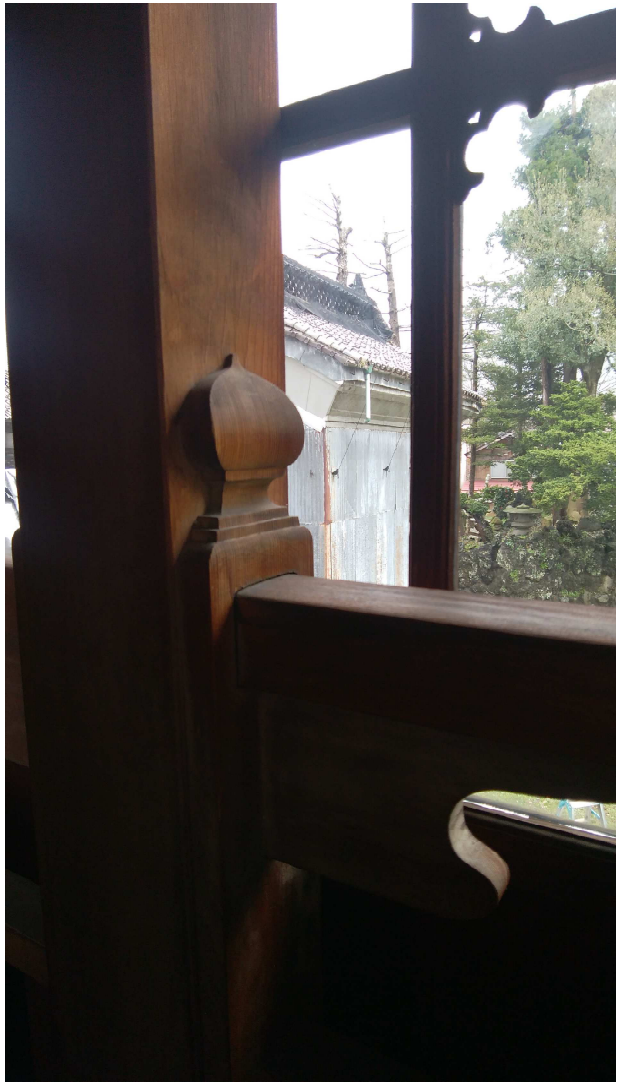
仁太郎さんの、心意気ではないかと、密かに思っています。
きっと持っていただろう創業者の一面は、ここにしか見出せません。

２. 離れの二階、廊下の手摺りの飾り

さりげなく彫られた宝珠です。

美しい曲面で削られており、
仁太郎の美意識を感じます。

さりげない手摺りの飾りの
宝珠ですが、



実は手摺りの雲形は「龍」を想起させるもので、
そして宝珠は、屋敷中の夥しい数の龍が
求めている「お浄土」を
象徴するものではないか
と、密かに考えています。

地域の安寧から商売繁盛、子孫繁栄を願い、
感謝に至る祈りの空間のまとめとして、
龍が棲む雲間に見える宝珠が、
最もふさわしいのでは、と思っています。

お客様も、賛成してくれるように思います。
二階にご案内できるようになったら、ぜひ
話してみたい、欠かせない話題になりそうです。

薬師如来と宝珠

登り龍と下り龍を随える薬師如来

３．離れの一階、新井石禅師の書

これは「美」とは異なりますが、美しい縁とも
云うべきストーリーです。

話す気になれば一時間でも話すことがでてくる、
長岡観光の、とっておきの「お宝」かも
知れません。

全体の関連する話題は、このような項目です。

関係図

二代駒形宇太七

初代駒形宇太七
法名　堅正

二代宇太七と
友人・山本五十六

二代宇太七を
継いだ、弟・十吉

景仰会初代会長
の駒形十吉氏

吉澤家・
初代仁太郎

新井石禅師
曹洞宗教学部長
雲洞庵方丈
総持寺管長

橋本禅厳師
石禅師に師事
雲洞庵

堅正寺

十吉氏
長岡のアートにも
多大の貢献

菩提寺　定正院
曹洞宗

曹洞宗総本山は
永平寺と
総持寺

雲洞庵

岸宇吉

岸吉松（テキサス州のオレンジ油田）

総本山総持寺

建功寺
本山近門寺院
枡野俊明住職

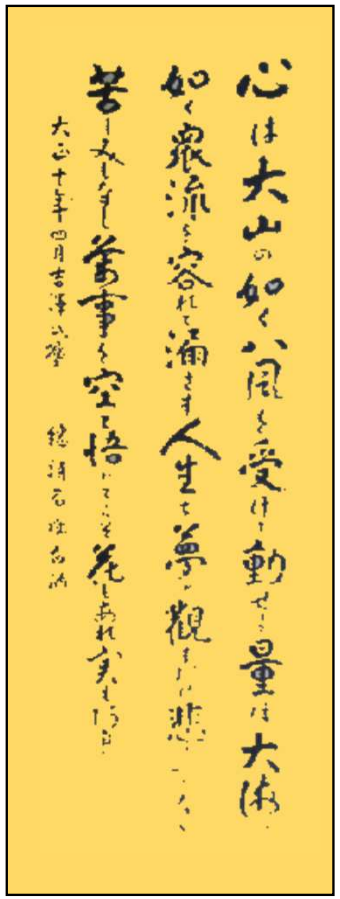
庭園デザイナー
枡野俊明師
県立近美の
前庭を設計

お墓の隣に、竹駒
稲荷と同じキツネ像

山本五十六
堅正寺・講堂で
記録された言葉

長谷川赳夫

野本恭八郎



どこから切り出すか、により、いろいろな話ができます。
以下は、現役の仕事人のゲストへの話。

山本五十六の言葉として知られる、“やって見せ　・・・” の語は、
仕事人なら一度は耳にしたことのある言葉と思いますが、
五十六さんから話しますと、駒形宇太七と長岡中学時代からの
友人だったということから始めます。宇太七が堅正寺建造直後に
早世し、後を継いだのが弟・駒形十吉。 その十吉が始めた寺の
講演会の記録集に、五十六の講演として記されていたのです。
この話の途中に、堅正寺住職として招聘された橋本禅厳師と
名僧・新井石禅師との出会い、そして生涯の師弟関係も、なんとも
云えない話です。

左の“やって見せ”　の語が
世の中に残ったのは

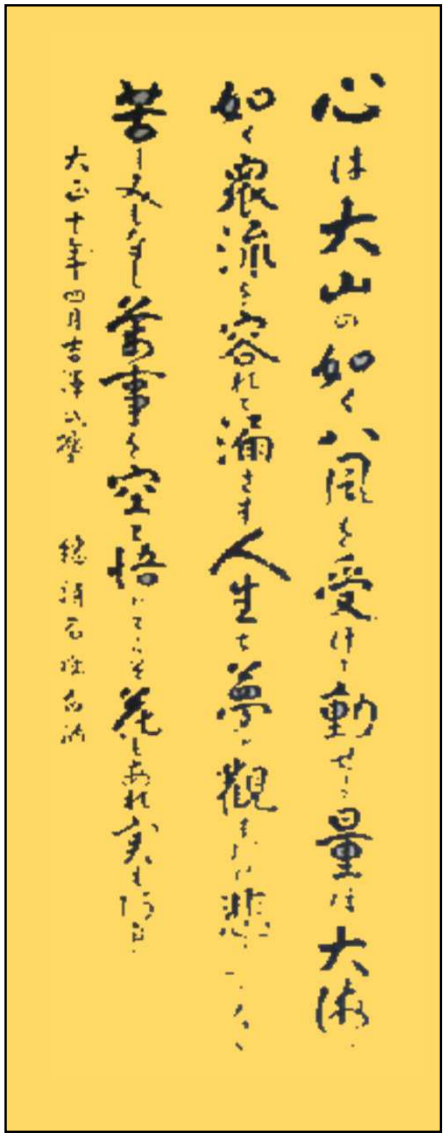
右の書の新井石禅師から続く
「縁」あったれば、こそ。

⇩

まさに奇縁・奇遇の重なりです。

やって見せ　説いて聞かせて　やらせてみ
讃めてやらねば　人は動かぬ

山本五十六　堅正寺　講義録（橋本禅厳記）



その駒形十吉氏の、銀行家、事業家としての活動も、さることながら、時代を先取りした企業メセナの活動も、際立っています。

アートだけでも、長岡、そして新潟県に残した業績は、あまりに大きい。

加山又造画伯、平山郁夫画伯を、二人が若い時から支援してきたことは、現代日本画への貢献でもあり、長岡現代美術館を開設し、美術館賞展を続けたことは、開館が1964年という前回五輪の年であったことも併せ、日本現代美術への大きな貢献です。

石禅師が、若いころに雲洞庵の方丈に就任したことも、
大きな縁です。
禅厳さんの生涯の師であった石禅が雲洞庵の方丈であった
ということがなければ、師の死後に禅厳さんが雲洞庵の教
師になることもなかったでしょう。
そして駒形宇太七が「誰か、ふさわしい人」を探しに雲洞庵を
訪れたとき、当時の方丈様が禅厳さんを推薦することも
なかったに違いないのです。
そしたら、“やって見せ ･･･” は世に残らなかった。
魚沼からのゲストには、欠かせない切り口です。

どこから話しても、長岡ガイドの本流につながります。
まさに「衆流を容れて漏らさず」です。

更に範囲を摂田屋に広げれば、長岡観光の代表をほぼ網羅します。
サフラン酒は、かつて三尺玉打ち上げのスポンサー。
吉乃川も、現代のスポンサー。
サフラン酒に山本五十六も登場し、光福寺は河井継之助。
信濃川の伏流水は、太田川の扇状地とともに、摂田屋の醸造の
水をもたらし、三国街道は、魚の寺泊が出発の地です。
五十六さん、堀口大學が歩いた村松への道もあります。
その村松の先が、蓬平、山古志です。
アートの川上四郎、平澤熊一、駒形十吉さんも関係しています。
戊辰の役、太平洋戦争の長岡空襲も、話題になります。
良寛さんも、三条地震と中越地震とのこじつけですが。

曇鸞『往生論註』には「たとえば浄摩尼珠（じょうまにしゅ）を、之れを濁水に置けば水即ち清浄なるが如し。若し人無量生死の罪濁有りと雖も、彼の阿弥陀如来の至極無生の清浄宝珠の名号を聞きて、之れを濁心に投ずれば、念念の中に罪滅し、心浄にして即ち往生を得」とある。